船越小学校のあゆみ

（創立当初）

船越小学校は、終戦直後の1945年（昭和20年）11月25日、戦前の製糖工場跡地に、児童数532人、職員数16人の「8年制初等学校」として創立された。

当時船越は近隣村民や国頭の住民が収容され、また百名や知念・志喜屋方面に収容された村人の帰還、南洋方面や海外からの引き揚げ者等で急激な人口増となり、翌年の4月には児童数は1832人にふくれあがった。その後、他村民は移動し児童も減少して、1947年4月には591名に落ち着いた。当時はテント張りやコンセットの校舎で、学用品もそろわず、缶詰め木箱を利用した机、弾薬箱の椅子、ベニヤ板の黒板、英字の書かれた紙の裏面を利用したノート、教科書の代わりに教師がガリ刷りの本を使用する等の有様であった。しかし、当時の村人や教職員の教育への情熱は高く、後援会（1953年に現PTAに改組）を結成し、運動場の設置、校舎の改築、学用品を揃える等、学校教育の充実が図られていった。これまで10年の節目ごとに創立記念の事業が行われ、学校の施設設備の充実に大きく寄与した。

（学制改革後）……校名改名、「ミルク給食開始」「校歌制定」「校歌ダンス創作」

1948年、学制改革によって「6・3・3制」になり、初等科「6年制」の小学校となった。1949年にはミルク給食開始。1951年、「船越初等学校」から「船越小学校」へと改名した。1952年には知念地区美化審査で一位となり以来環境美化の伝統校として今日まで引き継がれている。同年には「校歌」を制定。当時は、「青田の中にそびえ立つ」と校歌に歌われているように学校の校舎の周辺は水田に囲まれ、その様子は学校の校歌からうかがい知ることができる。翌５３年には「校歌ダンス」が創作された。こうして創立から数年経過して学校の基礎が着々と整えられてきた。

（復帰以後）

復帰以後は、道徳教育研究校、交通安全優良校として知られた。平成7年（1995年）には創立50周年の記念事業が盛大に行われ、「豊かな心」の石碑や校門のアーチ、体育館へのアーケード等学校の施設設備の充実が図られた。その後、文部省から給食研究校に指定され、給食指導の改善充実、わんぱく農園の活用等学校と地域が一体となった研究が行われ、平成12年度には全国学校給食研究協議会の場において「文部大臣賞」を受賞。平成17年の創立60周年には、節目を記念するともに玉城村立最後の学校として記念事業がおこなわれ、学校車の購入、図書の充実等が図られた。

平成18年1月1日、玉城村が、知念村、佐敷町、大里村と合併して「南城市」となり、校名も「玉城村立船越小学校」から「南城市立船越小学校」へと改名した。そして、平成22年12月に新校舎平成24年2月に新体育館・新運動場が完成し、児童は新しい学舎で学習している。平成25年には、県退職校長会より「善行賞」をいただいた。このようにして戦後まもなく創立された船越小学校も、3600有余の（令和３年3月31日現在）の卒業生を世に送り出している。

〈船越校区の概況〉

船越小学校は、船越、愛地、前川の3集落から構成されている。学校は県道48号線沿いの船越区に位置。船越の土壌は島尻群層から成るクチャで昔は湖か湿地帯であった。地名の船越は「船で越す」ことから由来しているという。船越を含む周辺は盆地となっていてその周りを琉球石灰岩の小高い丘が取り囲んでいる。

学校の西側は愛地集落で、船越と愛地集落を挟んで大城ダムを水源とする雄樋川が流れ、玉泉洞を通り港川を経て太平洋に注ぐ。学校の北側の丘は船越集落の発祥地でグスク跡も残されていて、現在ゴルフ場が隣接している。東側は糸数グスク、アブチラガマ（戦跡地）がある。南側は前川集落があり、玉泉洞で知られる沖縄ワールドへと続く。牛を中心とする畜産、酪農も盛んである。